第 6 類

身体表現の授業が保育者を目指す学生の身体表現に対する主観的認識に与える影響
—身体表現Ⅰの授業の受講前と受講後の比較—

川野　裕姫子　　橘　未都

KAWANO Yukiko　TACHIBANA　Misato

幼児の発達において身体表現等の自己表現は不可欠であり，保育園や幼稚園において身体表現に触れる機会を提供することが求められている。現行の課題として保育者の経験不足や苦手意識により実施が難しいという現状が報告されている。本研究では保育者養成校における授業内容や学生の身体表現に対する意識に着目し，学生の身体表現に対する認識がどのように変化するかを明らかにすることとした。

本研究では、短期大学(保育者養成校)における身体表現Ⅰの受講生 50 名を対象として授業前後にアンケートを実施した。アンケートは 4 件法で解答を求め，t 検定を実施し授業前後の身体表現に対する意識変化を検討した。調査の結果，学生の身体表現に対する好感度が有意に向上し，実際に身体表現を実践する際の羞恥心は有意に減少することが示された。これらのことから，身体表現を在学時に学ぶことで，保育者として現場で活動し始めた際に，身体表現に対する苦手意識を緩和できる可能性が示された。

キーワード：保育者養成、身体表現、ダンス

1. はじめに

身体表現等の自己表現の経験は幼児の発達において不可欠である。身体表現を通して自己を表現する機会が得られないと，考えを上手く表現することが苦手であったり，人の立場に立って物事を考えたりできない子どもに成長してしまう可能性を指摘する報告があるからである[1)]。そのため，生活に身体表現を取り入れ，乳幼児が自己の表現等を経験する機会を設けることは重要といえる。少子化や核家族化，共働き家庭の増加に伴い十分に身体表現の時間を家庭で確保することは容易ではない[2)]。昨今，一日の大半を保育施設で過ごす乳幼児は多く，集団生活をすることで自然と他者と関わる機会は得られる。しかし，身体表現に関しては，保育者が意図して取り入れなければ幼児は経験することが出来ず，もし保育者が身体表現に対し苦手意識を持っていれば幼児に表現の機会を十分に提供できない可能性が高くなる。

保育者が自分自身の経験不足や苦手意識を理由に，身体表現の実施に困難を感じていることは現行の課題として指摘されている[3-7)]。幼児の多くはリズミカルな音楽が流れると，身体を揺らしたり，ジャンプをしたり，回ったりと音に合わせてリズムをとる。そして，それに伴い心が解放され，身体も緩み笑顔になる。しかし，成長と共に身体表現に触れる機会は減り，身体表現に対し「不得意，苦手である」と感じるようになる[8)]と報告する研究もある。そもそも，「身体表現とは何か分からない」という現場の声も珍しくない[9)]。身体表現が自由で多様な，決まった答えのない「ゴールフリー」なものである[10)]と述べられているように，身体表現には既成ダンス，リズムダンス，伝承的郷土的遊戯，手遊び，歌遊び，発表会ダンス，フォークダンス，リズム表現，即興的ダンス，創作ダンスなどの多岐に渡った内容が存在すること[11)]もその一因と考える。

幼児と触れ合い身体表現の場を提供することで保育者が実践的に経験を積み学んでいくことはもちろん可能ではある。しかし，保育者が現場で行っている身体表現の内容は，保育者の学生時代の学習内容と同様の傾向であり，保育者の学生時代の学習内容に身体表現は端を発しているという指摘がある[3]。また，身体表現は「幼児への関わりに高度な専門性が必要であり，それ故に遊びの展開や指導・援助の困難さが従来より指摘されてきた領域でもある」とも考えられており[12]，これらのことは保育者養成校の持つ役割の重要性を示唆する。この様な背景から，保育者養成校における授業内容についても改めて指摘され，多くの専門家がその指導について研究し，実践内容を報告している[1,3,5,11)13-16]。川野らは保育実習時に学生が実施する保育内容を調査し[6]，金らは身体表現の授業に着目し，学生は様々な教師の言葉がけによって指導の工夫等に気付くことができることを報告している[17]。また，長野らは，保育現場における身体表現活動を充実させるために，保育者養成校在学時に幼児の年齢に応じた身体表現能力や身体表現そのものの重要性を理解し，様々な身体表現に触れることの重要性について説いている[18]。これらの報告により、保育者を目指す学生の身体表現に対する意識の傾向を把握することは,今後の保育者養成校での授業の実技内容や教材研究の参考となる資料を提示していることが予想される。

以上から，身体表現の授業構成や授業展開によって，学生の身体表現に対する認識は大きく左右させると推察できる。そして，保育者のみならず，実際に保育される幼児にとっても有効的であると考えられる。そこで本研究では，身体表現の授業において学生の身体表現に対する認識がどのように変化するかを明らかにすることとした。

2. 方 法

対象

本研究では，K 短期大学(保育者養成校)における身体表現Ⅰを 2021 年度に受講した長期履修制 2 回生の計 50 名を対象とした。有効回答学生 40 名を評価に利用した。K 短期大学保育者養成校は，2 年制と長期制履修制（3 年制）課程が設置されており，長期制履修制在籍の学生は，2 年制のカリキュラムを 3 年間で履修することとなっている。

本研究は，神戸教育短期大学研究委員会審査の承認を得ている。アンケート参加者には，アンケート実施前に研究の趣旨を十分に説明し，同意を得た。

また，本研究の対象となった身体表限Ⅰの授業は，必修科目であり，こども学科の 2,3 回生時には全員約 120 名が受講している。

調査方法

アンケート調査では，身体表現の授業が受講生の身体表現に対する意識に与える影響を検討するため身体表現の講義，第 1 回目(受講前)と 15 回目(受講後)の授業にてアンケート調査を実施した。講義時間内に QR コードを配布し，google forms にて回収した。

質問事項

受講者の身体表現に対する意識や生活習慣を調査するために以下の 8 問を調査した。

1. 日常生活の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか
2. 授業(身体表現Ⅰ)の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか
3. 日常生活の中で身体表現(ダンス)を行う機会はありますか(身体表現Ⅰの授業は含みません)
4. 日常生活の中で身体表現(ダンス)に触れる機会はありますか(テレビ・公演など)
5. 人前で(クラスメートの前で)身体表現（ダンス)を行うことに抵抗はありますか
6. 幼児の発達に身体表現は必要だと感じますか
7. 身体表現を学ぶ上で最も必要だと考えるスキルや経験は何だと思いますか
8. 身体表現を学ぶならどのように学びたいと考えますか

質問 1,2 は身体表現に対する好感度について，“好き”（4 点）～“嫌い”（1 点）の 4 件法で回答を求めた．質問 3,4 は日常生活での身体表現への関わりについて，その頻度を“よくある(週 4 回以上)”(4 点)～“全くない”(1 点)の 4 件法で回答を求めた．質問 5,6 は身体表現の実施に関わる指標として評価するために，質問 5 では“ない”(4 点)～“ある”(1 点)の 4 件法で回答を求め，質問 6 では“思う”(4 点)～“思わない”(1 点)の 4 件法で回答を求めた。質問 7 は身体表現の修得に対する意識を調査するために，身体表現の修得に影響を与えると考えられる“授業でのダンス経験” “授業外でのダンス経験(ダンススクールなど)”“声楽経験” “ミュージカル経験” “楽器経験(ピアノやバイオリンなど)” “保育経験(保育園でのアルバイトなど)” “こどもと遊んだ経験” “こども相手のインストラクター経験” “ダンスを楽しいと思う気持ち” “性格

(人前で表現することを得意とするなど)”　“羞恥心を無くすこと”“ない”の12件法で回答を求めた。問8は身体表現の修得方法として“授業”“オンライン動画を観て”“ダンススクールに通って”“本を読んで”“友だちとの遊びの中で”の5件法で回答を求めた。それぞれの質問において，回答は1選択肢とした。また，アンケートではより授業の与える効果を検討するために学籍番号の記入を求めた。

統計学的解析

授業が受講者の身体表現に対する意識や生活習慣に及ぼす効果を検討するために，質問1〜6に関しては対応のあるt検定を用いて，受講前後のアンケート結果を比較した．有意水準は0.05とし，統計処理にはSPSS Statistic 25(IBM USA)を用いた。

3.　結　果

アンケート結果

「日常生活の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか？」の問いに対して，受講前は“好き”と回答した学生が6名，“まあまあ好き”と回答した学生が19名，“あまり好きではない”と回答した学生が14名，“嫌い”と回答した学生が1名であった。受講後は“好き”と回答した学生が11名，“まあまあ好き”と回答した学生が20名，“あまり好きではない”と回答した学生が9名，“嫌い”と回答した学生は0名であった(表1)。

	受講前	受講後
好き	6	11
まあまあ好き	19	20
あまり好きではない	14	9
嫌い	1	0

表1

授業(身体表現Ⅰ)の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか」の問いに対して，受講前は“好き”と回答した学生が5名，“まあまあ好き”と回答した学生が16名，“あまり好きではない”と回答した学生が16名，“嫌い”と回答した学生が3名であった。受講後は“好き”と回答した学生が14名，“まあまあ好き”と回答した学生が19名，“あまり好きではない”と回答した学生が7名，“嫌い”と回答した学生は0名であった(表2)。

	受講前	受講後
好き	5	14
まあまあ好き	16	19
あまり好きではない	16	7
嫌い	3	0

表2

「日常生活の中で身体表現(ダンス)を行う機会はありますか？(身体表現Ⅰの授業は含みません)」の問いに対して，受講前は“よくある(週4回以上)”と回答した学生が1名，“少しある(週1回程度)”と回答した学生が3名，“ほとんどない(月に1回程度)”と回答した学生が6名，“全くない”と回答した学生が30名であった。受講後は“よくある(週4回以上)”と回答した学生が2名，“少しある(週1回程度)”と回答した学生が5名，“ほとんどない(月に1回程度)”と回答した学生が8名，“全くない”と回答した学生が25名であった(表3)。

	受講前	受講後
よくある	1	2
少しある	3	5
ほとんどない	6	8
全くない	30	25

表3

「日常生活の中で身体表現(ダンス)に触れる機会はありますか(テレビ・公演など)」の問いに対して，受講前は“よくある(週4回以上)”と回答した学生が10名，“少しある(週1回程度)”と回答した学生が17名，“ほとんどない(月に1回程度)”と回答した学生が6名，“全くない”と回答した学生が7名であった．受講後は“よくある(週4回以上)”と回答した学生が20名，“少しある(週1回程度)”と回答した学生が14名，“ほとんどない(月に1回程度)”と回答した学生が6名，“全くない”と回答した学生は0名であった(表4)。

	受講前	受講後
よくある	10	20
少しある	17	14
ほとんどない	6	6
全くない	7	0

表4

「人前で(クラスメートの前で)身体表現（ダンス)を行うことに抵抗はありますか」の問いに対して，受講前は“ない”と回答した学生が2名，“ほとんどない”と回答した学生が4名，“少しある”と回答した学生が13名，“ある”と回答した学生が21名であった。受講後は“ない”と回答した学生が15名，“ほとんどない”と回答した学生が12名，“少しある”と回答した学生が10名，“ある”と回答した学生が3名であった(表5)。

	受講前	受講後
ない	2	15
ほとんどない	4	12
少しある	13	10
ある	21	3

表５

「幼児の発達に身体表現は必要だと感じますか」の問いに対して，受講前は“思う”と回答した学生が31名，“少し思う”と回答した学生が9名，“あまり思わない”または“思わない”と回答した学生はそれぞれ0名であった．受講後は“思う”と回答した学生が28名，“少し思う”と回答した学生が12名，“あまり思わない”または“思わない”と回答した学生はそれぞれ0名であった(表6)。

	受講前	受講後
思う	31	28
少し思う	9	12
あまり思わない	0	0
思わない	0	0

表６

「身体表現を学ぶ上で最も必要だと考えるスキルや経験は何だと思いますか」の問いに対して，受講前は“授業でのダンス経験”と回答した学生が5名，“授業外でのダンス経験(ダンススクールなど)” と回答した学生が3名，“保育経験(保育園でのアルバイトなど)” と回答した学生が1名，“こどもと遊んだ経験” と回答した学生が1名，“こども相手のインストラクター経験” と回答した学生が2名，“ダンスを楽しいと思う気持ち”と回答した学生が22名，“性格(人前で表現することを得意とするなど)”と回答した学生が5名，“ない” と回答した学生が1名であった．また，“声楽経験” “ミュージカル経験” “楽器経験(ピアノやバイオリンなど)” “羞恥心を無くすこと” と回答した学生はいなかった。受講後は“授業でのダンス経験”と回答した学生が8名，“授業外でのダンス経験(ダンススクールなど)” と回答した学生が3名，“楽器経験(ピアノやバイオリンなど)” と回答した学生が2名，“保育経験(保育園でのアルバイトなど)” と回答した学生が1名，“こどもと遊んだ経験” と回答した学生が2名， “ダンスを楽しいと思う気持ち” と回答した学生が21名，“性格(人前で表現することを得意とするなど)“と回答した学生が4名であった．また，“声楽経験” “ミュージカル経験” “こども相手のインストラクター経験” “羞恥心を無くすこと”と回答した学生は0名であった(表7)。

	受講前	受講後
授業でのダンス経験	5	8
授業外でのダンス経験	3	3
保育経験	1	1
こどもと遊んだ経験	1	2
こども相手のインストラクター経験	2	0
ダンスを楽しいと思う気持ち	22	21
性格	5	4
声楽経験	0	0
ミュージカル経験	0	0
楽器経験	0	2
羞恥心を無くすこと	0	0
なし	1	0

表７

「身体表現を学ぶならどのように学びたいと考えますか」の問いに対して，受講前は“授業” と回答した学生が19名，“オンライン動画を観て” と回答した学生が7名，“ダンススクールに通って” と回答した学生が6名，“友だちとの遊びの中で” と回答した学生が8名，“本を読んで” と回答した学生は0名であった。受講後は“授業” と回答した学生が33名，“オンライン動画を観て” と回答した学生が2名，“ダンススクールに通って” と回答した学生が1名，“友だちとの遊びの中で” と回答した学生が4名であった。また，受講後においても，“本を読んで”と回答した学生は0名であった(表8)。

	受講前	受講後
授業	19	33
オンライン動画	7	2
ダンススクール	6	1
友達との遊び	8	4
本	0	0

表８

授業前後の比較

受講前後の受講者の回答を比較したところ，「日常生活の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか」($p<0.00$)(図 1-1)，「授業(身体表現Ⅰ)の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか」($p<0.00$)（図 1-2）の問いにおいては有意に好感度が増加することが示された．「日常生活の中で身体表現(ダンス)に触れる機会はありますか(テレビ・公演など)」の問いにおいては，その頻度が有意に増加していた($p<0.00$)（図 1-3）．また，「人前で(クラスメートの前で)身体表現（ダンス)を行うことに抵抗はありますか」の問いにおいては，その抵抗感が有意に減少することが明らかとなった($p=0.04$)（図 1-4)。

「日常生活の中で身体表現(ダンス)を行う機会はありますか(身体表現Ⅰの授業は含みません)」と「幼児の発達に身体表現は必要だと感じますか」の問いにおいては有意な変化は認められなかった。

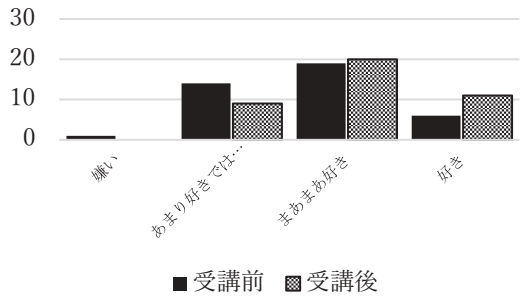

図 1-1

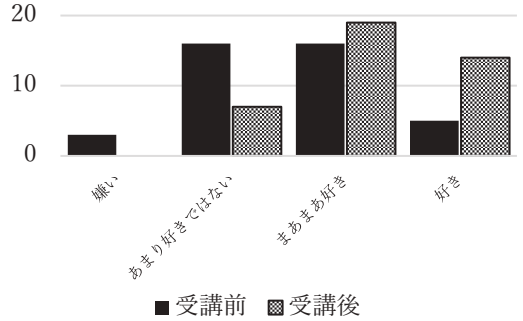

図 1-2

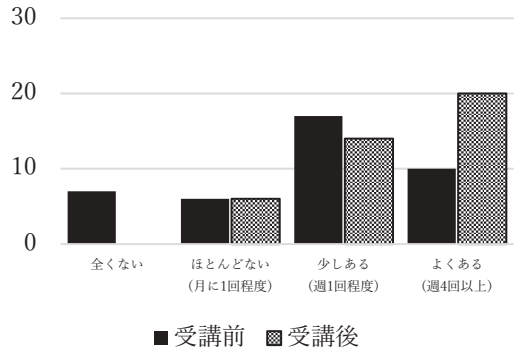

図1-3

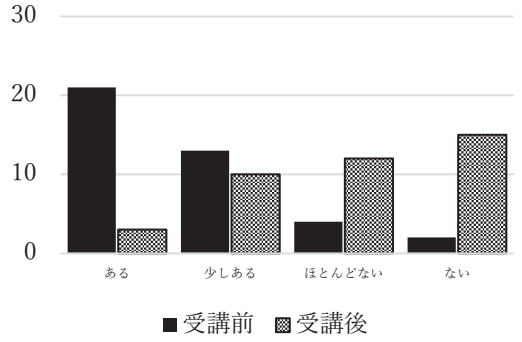

図1-4

授業前後身体表現に対する意識で有意な変化の認められた質問事項．第1週の授業にて行ったアンケート結果を受講前，第15週の授業にて行ったアンケート結果を受講後とする．縦軸に人数，横軸に質問の返答内容を示す。

図1-1：「日常生活の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか」の問いの結果を示す。図1-2：「授業(身体表現Ⅰ)の中で身体表現(ダンス)を行うことは好きですか」の問いの結果を示す。図1-3：「日常生活の中で身体表現(ダンス)に触れる機会はありますか」の問いの結果を示す。図1-4：「人前で(クラスメートの前で)身体表現（ダンス)を行うことに抵抗はありますか」の問いの結果を示す。

4. 考 察

本研究では身体表現の授業受講前後に，受講者の身体表現に対する意識を調査し，受講生に授業が与える影響を調査した。また，アンケートを用いて受講者における身体表現の修得に対する意識も明らかにした。

近年，目まぐるしく変化する社会情勢の中，子どもたちの健全な心と身体の育成を支えることは現代社会における重要課題である．成長過程において，子どもたちが豊かな感性や表現力を養い，想像力を豊かにするにあたり，身体表現を積極的に取り入れた保育活動は不可欠で

ある。しかし，「身体表現」は定型的な枠で捉えにくいことから，研究実績は十分でない[19]。そのため，保育士を目指す受講生を対象に彼らの持つ身体表現に対する意識を調査し，授業前後における意識変化を検討した本研究は，保育者養成校における授業内容の構築に貢献できると考える。

本研究で対象となった身体表現Ⅰの授業内で担当教員は，身体表現とは身体を使って気持ちを表現するものであり，自己表現に対しては下手であるとか，間違った動きは決してなく，評価の対象にはならないと伝えていた。また，人の持つ感情はそれぞれ異なるため，同じ課題（テーマ）で表現したとしても，表現の仕方が個々により異なることは当然であることと指導していた。そして，自分自身が自由に動くことを楽しみ，気持ちを開放できる場所として身体表現を受講することが大切である。後の実習や保育現場においても子どもの動きから，その時の子どもの心身の様子が把握できるような保育者に繋がる[20]ことも教授していた。以上のことから，身体表現に対する否定的な感情を緩和することに繋がり，授業を通して苦手意識を多少なりとも克服でき，授業内外関わらず身体表現を行うことに対する好感度が高まったと考える。また，授業内で表現の際は，「思い切って川を跳ぶように跳んでみましょう！」や，「アリさんのように小さく歩いてみましょう！」などの動きを構成する条件（時間的要因，空間的要因，力性要因）[21]を付けた言葉がけを重要視していた。そのため，学生自身が実践的な言葉がけを学ぶことが出来，具体的に身体表現を子どもに提供する姿がイメージできたと推察する。本山が示すように，本授業で用いた言葉がけは，学生が日常から非日常的な身体表現の世界へ切り替えて身体表現を経験できたことで，羞恥心を取り除くことが可能になったと考える[22]。保育の現場において，言葉による指導は子どもが自分の気持ちを表現するのに影響を与えると説かれているように[23]，学生たちへの適切な「言葉がけ」は身体表現に対する意識を変化させることを示唆した。

また，昨今，テレビやSNSなどで主として取り入れられている現在の流行のダンス（ジャズダンスやヒップホップなど）ではなく，本授業では，型のあるダンス（リズム遊び，既成の曲の振り付けダンス，リズムダンスなど）から型のないダンス（模倣遊び，リズム表現，ごっこ遊び，創作的ダンス）[2]へと初歩的段階から応用的段階への表現の仕方[4]を取り入れた。受講者は，授業にてリズム遊びや模倣遊び，リズムダンスを経験することで，自分のリズムで思いのまま自由に動き，自己表現することの楽しさを経験し，多角的に身体表現を捉えられることに繋がったと考える。そのため，日常的にも身体表現を身近に感じられるようになり，日常生活の中で身体表現(ダンス)に触れる機会はありますかの問いにおいては，その頻度が有意に増加していたと考える。

加えて，人前で身体表現をする抵抗感も有意に減少したことから，学生自身が授業中に様々な表現を修得し，乳幼児期の身体表現はリズミカルな表現が望ましいことを体感したことで，保育者自らが，思いのままに楽しく動き，その動きを子どもたちと共有し模倣させることが最も重要[24]であることを認知できたと示唆する。

本研究の対象となった養成校はこども学科のみを設置しており，学生は保育者（基本的には保育士，幼稚園教諭，保育教諭）を希望して入学し，身体表現が保育者に必要な授業であることは承知している。また，本研究の対象となった身体表現Ⅰの授業を受講することで，より幼児にとっては身体表現の重要性に対する理解は深まったと考える。しかし，身体表現が受講前から嫌いな学生も少なからず存在し，授業を通しても認識を変えることができず，積極的に授業に参加できない学生も存在してしまった。その中には，保育者を目指したものの，在学中に保育への興味を失っている学生も存在していた。この様な学生は，残念ながら実習や保育の現場においても身体表現を実施しなければいいと否定的に捉え，その他の表現活動である造形（お絵描き，簡単なもの作り）や音楽（ピアノ，歌）などを実施し，特に，造形が多く用いられている現状である[2]。

受講前から多くの学生は身体表現の重要性を認識していたことと，一定数の学生の身体表現に対する苦手意識や嫌悪感は学生の中で個人差が多様であったため「幼児の発達に身体表現は必要だと感じますか」の問いでは有意な差が認められなかったと考える。また，身体表現を好意的にとらえる学生の数は増加したものの，ダンスに授業以外で取り組むなどの生活を変化させるまでの影響は身体表現Ⅰの授業のみではもたらせないことが明らかとなった。

今後の課題として，多様化する環境の中(注1)，これからの実習や保育現場において，乳幼児期の発育発達に応じた身体表現を取り入れられるように創造力やパフォーマンススキルを高め，自己の身体表現に自信をつけさる授業展開を進めていくように考える。

5. 結語

保育者養成校にて提供する身体表現の授業が，学生の身体表現に対する認識に与える影響を検討した。

結果，学生の身体表現に対する好感度が上がり，実際に身体表現を実践する際の羞恥心が減少することが示された。その要因としては、身体表現の授業を半期に渡り実践的な経験をすることのみならず，表現に対する適切な言葉がけを行うことにより効果が見られたのではないかと考える。意識の面では変化が認められたが，個々の日常生活に新たに身体表現を取り入れるまでの影響はないことが明らかとなった。より意義のある授業を学生に提供するためには，今後も実践的かつ学生の意識に寄り添った授業展開を推奨する。

6. 引用文献・参考文献

1. 仲田幸世. イメージをうごくや言葉で表現できる子を育てる援助の方法-劇遊びから劇創りを通して-. 沖縄市立美里幼稚園, 2013.
2. 川野裕姫子, 橘未都, 青木宏樹. 保育実習における身体表現遊びの実態及び受講生の身体表現遊びに対する意識-保育者養成校における「身体表現Ⅰ」の受講生を対象として-. 神戸教育短期大学教育実践研究紀要, 3, p. 21-33, 2021.
3. 高原和子，瀧信子，矢野咲子，怡土ゆき絵，青木理子，小川鮎子，小松恵理子. 保育者養成における身体を使った表現（身体表現）指導の実態. 福岡女学院大学. p. 71-75, 2017.
4. 宮下恭子. 学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究. 東京成徳短期大学紀要, 44, p.1-16, 2011.
5. 米倉 慶子. 身体表現指導のあり方. 永原学園西九州大学短期大学部紀要, 48: p. 89-93, 2017.
6. 川野裕姫子. 保育者養成における学生の身体表現に対する意識と授業の実態に関する調査研究「身体表現Ⅰ」の授業活動におけるアンケート調査から. 神戸教育短期大学教育実践研究紀要, 2, p.51-61, 2020.
7. 遠藤昌. 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について：身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して. 武庫川女子大学紀要, 54, p.91-99, 2007.
8. 久保景子. 学生の身体表現に関する意識調査. 有明教育芸術短期大学, 10, p.93-104, 2019.
9. 中村真由美, 宗宮悠子.保育現場における「身体表現」の理解に関する一考察. 清泉女学院短期大学研究紀要, 40, p. 33-40, 2022.
10. 村田芳子. 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？―学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ―. 体育科教育, 56(3), p.14-18, 2008.
11. 青山優子,井上勝子,蛯原正貴,小川鮎,小松恵理子,高原和子,瀧信子,宮嶋郁恵,矢野咲子., 乳幼児のための豊かな感性を育む身体表現遊び. (株)ぎょうせい, 2020.
12. 新川順子, 高橋敏之. 保育者養成における身体表現教育に関する研究の動向と課題. 教育実践学論集, 15, p.79-87, 2014.
13. 矢野下美智子., 保育者養成における身体表現の授業の在り方について－「身体表現を好きになること」と「授業内容」の関係－広島文化学園短期大学, p. 31-37., 2018
14. 多久保治江, 田辺圭子., 保育者養成における身体表現について(2) 北陸学院短期大学紀要, 9: p. 27-40. 1997.
15. 鈴木裕子，西洋子，本山益子，吉川京子., 幼児期における身体表現の特徴と援助の視点. 舞踊學, 25, p. 23-31. 2002.
16. 多胡綾花., 幼稚園における身体表現あそびの実践内容について一保育歴による違いから一. 湖紀要, 38, p. 21-36, 2012.
17. 金浦美咲, 小松恵理子. 保育者養成校における身体表現の授業研究. 南九州地域科学研究所所報, 38, p.9-19, 2022.
18. 長野真弓. 幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案. 心理社会的支援研究, 1, p.29-34, 金子書房, 2010.
19. 古市久子,身体表現の発達に関する研究の現状と課題 児童心理学の進歩, 46, 171-195, 2007.
20. 新山順子. 保育者養成における身体表現授業の学びと保育実践への有用性分析. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 18, p.19-28, 2011.
21. 青山理子，青山優子，井上勝子，小川鮎子，小松恵理子，下釜綾子，高原和子，瀧信子，宮嶋郁恵. 新訂 豊かな感性を育む 身体表現遊び，ぎょうせい,p.30-32, 2012.

22. 本山益子. 子ども・からだ・表現–豊かな保育内容のための理論と演習. 市村出版2003.
23. 田中麻紀子. 子どもの気持ちを引き出す保育者の言葉とかかわり. 夙川学院短期大学教育実践研究紀要, 11, p.13-23, 2018.
24. 半田結, 井上朋子, 永井夕起子. これからの表現教育の検討: 音楽・身体表現・造形の視点から. 兵庫大学短期大学部研究集録, 56(57), p.1-12, 2021.

注１． 多様性を以下に示す。

1. **文化的多様性：**
保育現場では、異なる文化や言語背景を持つ子どもたちが一堂に会することがある。教育者は異なる文化を尊重し，子どもたちが自分の文化や言語を認識できるような環境を提供する必要がある。

2. **性の多様性：**
男女の平等や性的な多様性に ついての理解が求められている。性別に基づくステレオタイプを排除し，子どもたちが自分の性別に縛られることなく，自由に選択できるような環境づくりが必要である。

3. **障がいのある子どもたちへの対応：**
障がいの ある子どもたちと無障害の子どもたちが共に学ぶ環境が増えている。施設やプログラムは、異なる能力やニーズに対応できるよう、アクセシビリティの向上や個別のサポートを提供する必要がある。

4. **家族構成の多様性：**
家庭の構成や形態が多様化している中で，教育者は様々な家族構造や価値観を理解し、尊重する必要がある。同性の親、一人親、異なる宗教やカルチャーを持つ家族など、多様な家庭事情に適応できる柔軟性が求められている。

5. **テクノロジーの利用：**
現代の子どもたちはデジタルツールやオンライン教育に親しんでいることから、保育現場でも適切なテクノロジーの活用やデジタルリテラシーの育成が求められている。

Abstract

Getting enough chances to experience physical expressions are necessary for healthy child development. As it requires efforts to provide adequate amounts into children's lives, expectations towards childcare-givers at nursery schools have been increased. However, many of childcare-givers show difficulty of providing enough opportunities of physical expressions due to lack of their experiences. We focused on classes given for those potential childcare-givers since childcare-givers often rely on what they have learned while at school. Therefore, we evaluated on influence of certain verbal prompts given in classes among potential childcare-givers.

The survey was given to 50 students registering in physical expression I at the week 1 and 15 of classes. Survey consisted of 8 questions and most of them had 4 points scale. Results showed a significant increase on students' preference on physical expressions and a significant decrease on a sense of shame of practice of physical expressions in the class. These indicated proper verbal prompts could ease their uncomfortableness of physical expressions.